

KANDAL 雑誌

Number
WINTER 1995

32

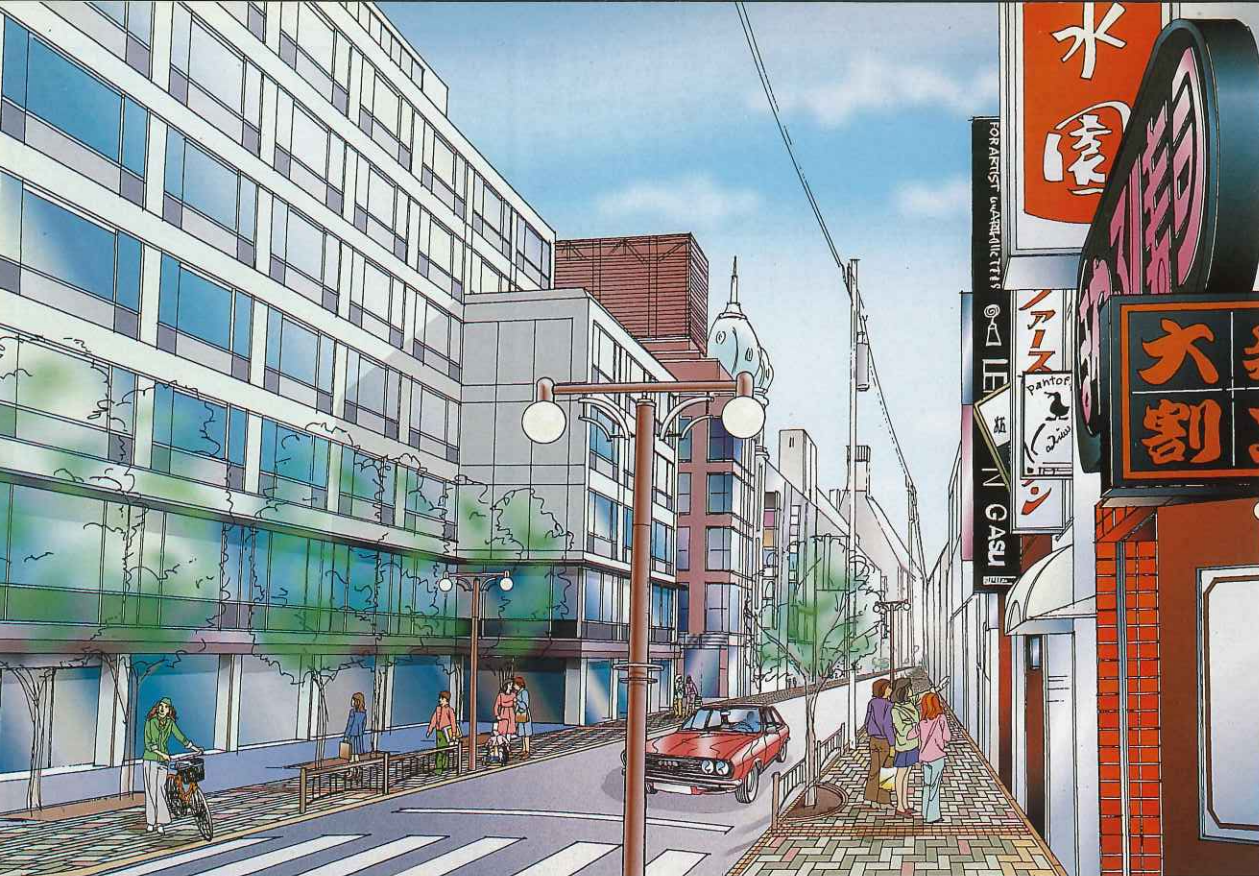


特集
茗溪通り

Kyujiro

お茶の水

茗溪通り



今年3月末に新しく生まれ変わる茗溪通り（電柱の向きは道路と平行になる）

昔から学生の街として親しまれてきた神田お茶の水。時代の流れと共に通りは整備され、空を埋めつくすかのようにオフィスビルが建ち並ぶ街並みに、懐かしい匂いを探すこともしだいに難しくなってきました。しかし、JRお茶の水駅前に伸びる茗溪通りには今もお変わることなく青春の思い出をたくさん詰めた店々や学生の笑い声や軽快な足音が一層この通りを賑やかにしています。



工事前の茗溪通り

「新しい考え方を導入しよう」と福田世英さん（前商店会長）の掛け声のもと、「継続」することが大切と2、3年かけて一件一件お店を回り、積み立て運動とカラー舗装についての説明をして賛同を募ったのです。地道な努力の積み重ねで現在では会員数64名という立派な基盤ができ、そして歩道工事の地元負担金としての600万円が集ったのです。

街の美化が唱えられる昨今、中でも歩道へのたばこの吸い殻、空き缶、チラシのポイ捨てのひどさが注目されています。7年前、お茶の水茗溪会では以前から問題になっていた歩道の改善を自らの力で実現させようと1口1、500円の積み立てを始めました。当初は商店会の会員が約30名。多くの人々の賛同と資金を集めるにはより多くの会員が必要ということで、まず会員の増員を第一に積み立て運動はスタートしたのです。しかし、そこには商店街の人々に運動の主旨が浸透しにくい状況（ビルのテナントとして入っている店舗の入れ替わりが早く新しい担当者に改めて説明・お願いをしなくてはならない）が大きな壁となって立ちふさがっていました。それでも、「やるのなら皆でやろう」

7年越しで実現化

お茶の水駅前と聖橋口を結ぶ164mほどの商店街には、飲食店・CD屋・本屋・画材屋・喫茶店などが軒を連ね、歩道にはお店の看板が並べてあったりと歩行者はすれ違う際はどちらかが道を譲らなくてはならないほど。そこで来たる3月末頃に、歩道拡張とカラー舗装を実現させ、明るくて歩き易い街路が誕生することになりました。

明るくキレイな商店街を自指して



その色、その柄、その組合せ。
タジマカーペットは、幅と奥行。
クリエイティブなデザインワークが
自由自在、思いのままです。

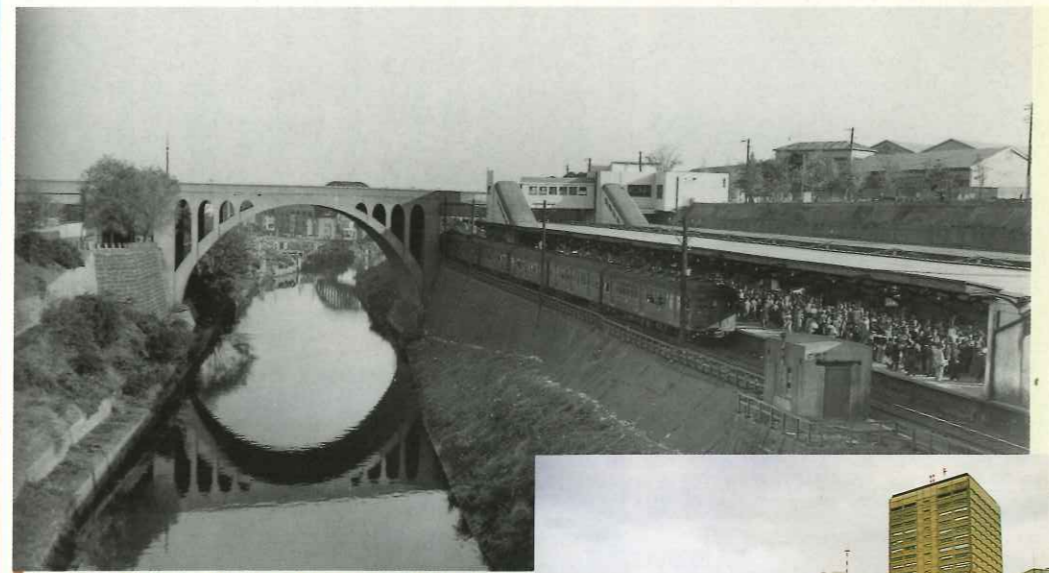
変幻

自彩

株式会社 タジマ
営業本部 ☎ 03-5821-7731 FAX03-3862-5908
東京営業所 ☎ 03-5821-7741 FAX03-3861-3615
大阪営業所 ☎ 06-441-5951 FAX 06-441-2596



写真で見るお茶の水



お茶の水橋より聖橋を望む
上の写真は昭和22年頃。ホームには人が溢れ、よく見るともんぺ姿の女性や大きな荷物を背負っている人もいます。電車も満員のよう。現在の聖橋周辺は川沿いにビルが建ち地下鉄の線路が川面に走り、その先には電気街がみえる。



駿河台ニコライ堂上からの眺め

下の写真は明治22年に建設中のニコライ堂の足場上から撮影された写真の一部で西北より小石川から本郷を望んだもの。神田川沿いにお茶の水女子大の前身の女子高等師範学校、道路を挟んで順天堂医院が見える。手前側には江戸時代の旗本・御家人屋敷が並んでいた一帯で、洋風に建て替えられているものもある。長屋や土蔵は江戸以来のものだと思われる。尚、茗溪通りは関東大震災後の区画整理で作られたのでこの写真にはまだない。
(文章：角川書店「よみがえる明治の東京」参考)



特集 茗溪通り

今回の運動で一番大切だったことは、近隣のコミュニケーションであったことです。三位(住民・企業・行政)一体を唱える千代田区。茗溪通りの



「区(土木課)指導型のおかげで上手に進めることができました。また、区からの援助をいただけたというところは、資金面の援助だけでなく品質面でも高いものができます。基本は区道ですからね。」と、瀬川さん。今回の運動を街の美化運動のきっかけにしていきたい、とすでに次の課題(ごみ問題)に向け動き始めています。

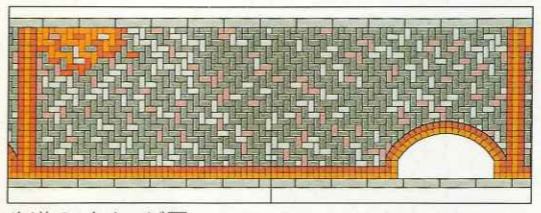


「違法駐車をなくすため歩道の高さを15cmにしました」と、設計担当の佐藤彰さん。



「住民とのコミュニケーションが一番大切です」と、中木謙蔵主査。

整備を実施しています。その進め方は、地元のみならずから道路の修景整備についてのご要望をいただき、実施にむけご理解とご協力をえるところから始めら



歩道のイメージ図

そのなかで潤いのある快適なまちづくりをめざし地域の道路を、都心区にふさわしいグレードの高い道路とするため「千代田区道路修景事業方針」に基づき道路修景計画調査主査(道路修景担当) 千代田区役所土木部管理課 計画調査主査(道路修景担当) Tel 3264-0151内2722

「茗溪通りにはたくさん飲食店が並んでいるため、カラー舗装に使用する石の色は、落ちつきのあるグレーを基調に油ジミの目立たない色を使用。その中に赤色などで学生街の若々しいイメージを表現している。」

「茗」はお茶の言葉・香りの高いお茶のことを指し、「溪」は美しい谷水、を意味するのです。当時の文人がいかにか自然と共にゆとりある生活を送っていたか：「学問の源はお茶の水にあり」なのです。

継続、そして次の課題へ

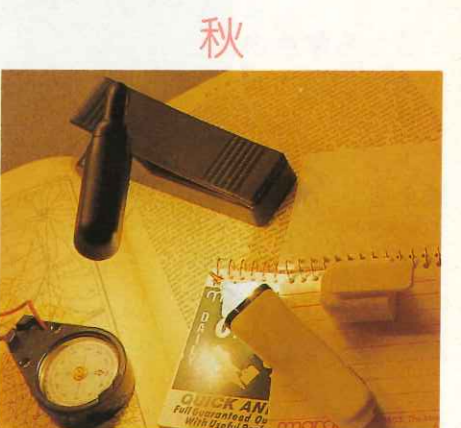
夜間人口が10人程のお茶の水茗溪会。近隣のコミュニケーションが少なくがちな状況の中で、この積み立て運動は住民と在勤者の間に連帯意識を作り上げたといえます。「長い時間かけて積み上げたことがとても力強いですね」と、運動開始当時会長を務めた福田世英さん。福田さんの街づくりに対する熱意は現会長の瀬川さんに確実に引き継がれ大きく育てられました。



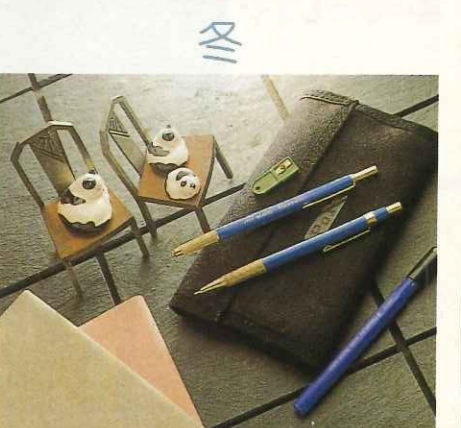
春



夏



秋



冬

カラー舗装は、その声に対する答えに一步近づいたといえるでしょう。
私達が担当しています
—— 窓口は千代田区役所土木部 千代田区では、区をとりまく様々な課題を解決していくため、新基本計画を策定し、区民要望に対応しています。

区としては要望のあった路線を調査し、整備対象にふさわしい路線を判断すると、道路の構造などを地元の皆さんとご相談して決め、区の事業をして予算化し、地元のご負担などもいただきながら、工事を進めます。そして、ご要望のあった道路は地域により愛される皆さんの道路として生まれ変わり、利用されることとなります。

「茗溪」お茶の水の関係

「茗溪」は、神田山の麓(現お茶の水駅周辺)に高林寺という禪寺がありました。その寺の庭より良い水が湧き出ていたので、將軍秀忠公に献上したところ、秀忠公はお茶に用いて大変良い水だと褒めたそうです。以後もその水を將軍に差し上げるようになり、お寺はお茶の水高林寺と呼ばれ、周辺をお茶の水というようになりました。そして文人墨客らによって風流を楽しむ景色の良い場所となったことから「茗溪」「赤壁」と呼ばれたのでした。

季節感あふれる品揃えで
お客様のお越しをお待ちしております。

SANSEIDO STATIONERY PLAZA
三省堂書店

茗溪通りを

歩いてみれば……

「駿河台で商売を始めると必ず成功する」という言い伝えを耳にしました。本当かしらと思ひ、通りを眺めていくうちに、そこには確かに先代の夢や伝統をずっと守り続ける商人のかたくなさが漂う茗溪通りが目の前に真つすぐ伸びていました。

喫茶穂高 (創業昭和30年頃)

現在2代目の栗野芳夫さんは昭和45年にサラリーマンから喫茶店経営を受け継いだのです。

前身は洋服屋

私の父は神保町の洋服屋で丁稚奉行してそれから駿河台で店を持つたんです。昭和7年頃ですね。太礼服など宮中関係の洋服も作っていました。時代の流れて次第に既製服に押され、昭和30年頃に店の半分を利用して喫茶店を始めました。山好きだった母が「穂高」と名付けたんです。

何といても魅力満点、駿河台

私が店を継いだ頃の茗溪通りは学生でいっぱいでした。流れに逆って歩くことができない位で、店の並びはあまり変わりませんが住民がほとんど郊外へ越していきつきました。それでも私がこの地で喫茶店を続けるのは、神田そして駿河台が好きだからです。周りがきれいなオフィスビルに建て替えられる中、私のお店だけ手を加えずに居るのは時代遅れなのではないかと思っていました。ですが以前私が改装を考えていたら「全てを改装するのはもったいない。私に設計を任せてください」と、当時日本大学建築学部助手の森さんがレイアウト無償で手掛けてくれました。驚きましたが後で森さんは母と山を通じての友達ということが分かりました。現在の店の



「人情深いこの町が好きです」



▲ショーウィンドーには太礼服が飾ってある。昭和7年頃。

☎3292-9654

の内装は森さん設計のもので、これからは森さんと一緒に。森さんの熱意に感銘を受けてはね。思い返してみると時間の積み重ねで出来上がったものはお金では買えないものばかりなんです。人情とか……。だから私は駿河台にずっといるんです。



三進堂書店 (創業昭和22年)

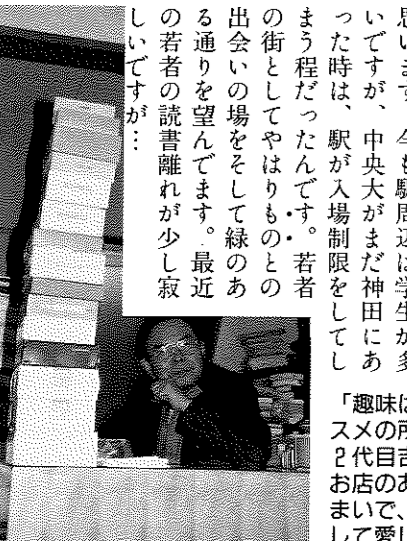
●初代吉田三三郎さんは恵比寿で本屋を開いていましたが空襲で焼失してしまつたため神田に移り再出発。神田には以前、三三郎さんの奉行先の本屋がありまして。今の屋号は奉行先の屋号「進省堂」と三三郎さんの「三」からできたんです。

聖橋が遊び場だった

私が小学生だった頃、土・日曜日は車が殆んど通らなかつたね。聖橋がよく遊んだものです。この茗溪通りは30年ほど前に歩行者天国として公開したことがあるんですがバスだけは除くことができました。



かったので結局長続きしませんでした。並木も今よりずっと多く歩道の両側に植えてあったんです。



今までの落ち着いた通りで

茗溪通りの自慢できる点は、駅前にもかかわらず落ち着いた店があつて雰囲気がいいところですね。ちよつと飲食店が多すぎるような気もしますが……。できればお茶の売場を増やしてあげればと思います。今も駅周辺は学生が多いですが、中央大がまだ神田にあつた時は、駅が入学制限をしてしまつた程だったんです。若者の街としてやはりものとの出会いの場をそめて緑の多い通りを望みます。最近の若者の読書離れが少し寂しいですが……

「趣味は山登り。神田でおススメの所はニコライ堂と、2代目吉田治男さん。現在もお店のあるビルの4階にお住まいで、緑ある通りを望みまして愛し続けています。」

☎3291-8242

黒岩スリッパ店 (創業昭和3年)

●初代黒岩勝美さんがスリッパ卸専門の店としてスタート。時代の流れと共に小売店に変更、現在3代目太郎さんが看板を守っています。

日本で唯一のスリッパ専門店

創業当時はまだげたや草履が主流のころでしたから、病院や学校ぐらしに需要がなかつたようです。現在は幅広く皆様にスリッパを愛用していただいています。最近では、右左サイズのあるスリッパに人気がありますね。スリッパだけのお店でこれだけの種類(約70点、1000種類程)を揃えているのは世界広しと言えどもあまり見かけないので



昭和3年(開店当時)のお店。フェノスアイレススリッパを輸出するところ(木箱はその荷物)。左から2番目が初代黒岩勝美さん。



「初代はスリッパ職人だったんです」と、黒岩太郎さん。

ホリシー

明治の初期に日本に入ってきたスリッパは当時、お客様のためのスリッパ、ととらえられていたので(誰にでも合うようにということから)サイズをつけていませんでした。ですが初代は最初からすべてのスリッパにサイズをつけていたんです。

「インテリアを変えるようにスリッパも着替えて欲しいですね」と太郎さん。スリッパの歴史は以外と奥深いもの。これからは神田お茶の水で守り続けられていくことでしょう。

現在のお店の様子



☎3291-9618

瀬川小児神経学クリニック (創業明治42年)

明治42年に瀬川昌善さんによって設立され現在は4代目(江戸中期に本所で開業してから9代目)の昌也さんに引き継がれています。



現在は通りを望めるビルの2階で開業中

日本で最初の小児専門院としてスタートした当時は、木造モルタル3階建て、玄関の真上に当たる所には2階建ての塔がありました。高台の駿河台に建っていたのと、塔に昇ると5階に当る高さであったのとで神田は、もちろん、川向こうの本所深川まで眺められたそうです。大正12年の関東大震災による火災で病院は焼けてしまいました。その前に先生が患者、医局員、看護婦と共に上野動物園に避難していたため被災者は1人も出なかつたそうです。

現在は小児神経専門のクリニックとしてオフィスビルの2階からお茶の水を見つめています。

☎3294-0371

喫茶店「レモン」でスタート

戦後、昭和28年に現在の場所ですスタートとなりました。家内の以前から喫茶店をしたいとの希望で(お手伝いさんと一緒に)始めたんです。お店の名前はいろいろ考えた結果、「レモン」と付けました。お茶の水は学生街であること、そして彼らの「新鮮」というイメージからですよ。お客様の目の前で果物を絞って差し上げてたので「ジュースのお店」「レモン」なんて呼ばれてましたね。



「毎朝1時間キャカとバスに向かいます。」と2代目松永和夫さん。海釣りが好きとのこと。

レモン画翠の誕生

2回目の改装の時、店の半分に画材小売店として「画翠」を設けました。デザイン関係の学校が多かったのでいつも満員でした。昭和30年頃に建築家の境沢孝さんに内装を手付けていただき喫茶店と画材店との境界を全く排除してしまつたのです。同じ空間の中で異なる業種が商売をするという新しい発想で多分当店が初めてだったと思います。「レモンの袋を持っていないとお茶の水は歩けない」なんて言われてました。今ほど画材屋が多くなかつたこと、土地柄アカデミックな雰囲気のある所ですから、一種のブームができたんです。お茶の水にレモンあり/

☎3295-4681

天ぷら東雲 (創業昭和26年)

通りから一歩奥に入った所にあります。以前は出版業を営んで、戦後奥様の小川トシさんの天ぷら好きがお店を始めるきっかけになったとか。おすすめは天ぷら定食。ぜひ揚げたてをどうぞ!!



☎3291-0518